

Title	マライ・ポリネシア*dの再考察
Author(s)	崎山, 理
Citation	大阪外国語大学学報. 22 p.107-p.124
Issue Date	1970-02-10
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80372
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

マライ・ポリネシア諸語 *ɖ の再考察

崎 山 理

Das *ɖ der austronesischen Ursprache

Osamu Sakiyama

Als stimmhafter, retroflexer Verschlusslaut hat Dempwolff das *ɖ in der austronesischen Ursprache hergestellt, weil Java ɖ-(-ɖ-) als Entsprechung für Tagalog l-(-l-) sich ergibt. Aber Jv. ɖ findet sich nicht allein für *ɖ, sondern auch für *d —Tg. d-(-r-)— als Lautunstimmigkeit. Für diese Unstimmigkeit ist seine Erklärung folgend, daß Jv. Lehnwörter mit alveolarem d nicht mit seinem postdentalen d sondern mit seinem retroflexen ɖ einzubürgern pflegt.

Dieses ɖ, das nach seinen Gedanken von den indonesischen Sprachen nur das Jv. besitzt, kommt auch im Kawi und im Madura vor. Wenn man das ɖ bei der phonemischen Entsprechung in diesen Sprachen finden könnte, wird seine Erklärung den theoretischen Grund verlieren. Jedoch leitet das ɖ dieser Sprachen aus der Ursprache ab.

Aus diesem Gesichtspunkt habe ich eine neue Entsprechung zwischen den indonesischen Sprachen gezeigt, indem ich die Pränasalierung anwandte. Dann sind einige Wörter mit *ɖ und *d bei seiner Meinung verbessert worden.

I. はじめに

マライ・ポリネシア諸語にあってインドネシア語派に属する言語は、その音の種類が最も豊富である。同じくマライ・ポリネシア諸語の中のメラネシア・ポリネシア各語派においては、共通祖語の音が合一・融合してその音の数も少なくなっており、現在これらの語派の音のみをもってしては、共通祖語の音の正確な再構成を行なうことが理論的に不可能である。故に、マライ・ポリネシア諸語の音の再構成には、インドネシア語派の諸言語の比較が基礎的な作業として要請される。しかし音の種類が豊富であるだけに、その究極的な再構音の指定に当って例外としなければならぬものも多く現われてくる。

Dempwolff は、彼以前の姑息で射程の狭い局地的比較言語学を陵駕し、マライ・ポリネシア比較言語学を総合的・体系的に樹立した点で大きい功績を残した。しかし射程が広いだけに、扱

う言語の数もおのずと制限せられ、従ってそこには、又、木目の粗さもうかがわせるのであり、共通祖語音 *d の措定についても再吟味を必要とする点をのぞかせている。

尚、アメリカの Dyen の一連の論文は、Dempwolff の立論を修正・改良しようとするものであるが、彼の扱う言語は Dempwolff のそれと変らず、只単に、再構過程の説明を煩瑣にする一方において現われる例外的な音を解決するために、新たな再構音の設定、Dempwolff の再構音の訂正などを行なう。しかしその論においても依然として例外を残し、結果としては Dempwolff の是正にいたらず、異論を立てたに留まっている場合が多い。¹⁾

インドネシア語派に属する言語の音の多様性によって、マライ・ポリネシア共通祖語の再構音の設定には、できるだけ多くの言語を比較・対応させることがより密度・信頼度の高い再構音を導く方法へつながらせるといえよう。本稿で私が扱うインドネシア語派の言語は次の通りである。() の中は略語とする。又、本稿末の参考文献によってその出処を見られたい。

古代ジャワ語＝カウィ語 (Kw.)、現代ジャワ語 (Jv.)、古代バリ語 (OB.)、現代バリ語 (Bl.)、マドゥラ語 (Md.)、インドネシア語 (In.)、ホヴァ語 (Ho.)、カロ・バタク語 (Bt.)、ンガジュ・ダヤク語 (Dj.)、ブサン語 (Bsng.)、トンテムボアン語 (Ttb.)、ブギス語 (Bg.)、スμβα語 (Sm.)、タガログ語 (Tg.)、ビサヤ語 (Bs.)、イロカノ語 (Il.)。

II. Dempwolff の *d

そり舌音の *d が再構されるのは、非そり舌音 *d と区別されるべき対応関係があるからであって、まず *d は次のような音韻対応に基づいて措定せられる。²⁾

*d: Jv. d-, -d-, -d; Tg. d-, -r-, -d; Bt. d-, -d-, -t; In. d-, -d-, -t; Dj. d-, -d-, -t; Ho. r-, -r-, -tra.

*damar: Jv (N).³⁾ damar <樹脂>; Tg. damag <(松明の時刻＝) 夜>; Bt., In., Dj. damar <樹脂, 松明>; Ho. rami <樹脂を産する木, 樹脂>

*tuduh: Jv (N). tuduh <示す>; Tg. turo? <教え>; Bt. tuduh <示す>; In. tuduh <告訴する>; Ho. turu <示す事>

*tuŋkəd: Tg. tuŋkod <枕>; Bt., In. tuŋkat <枕>; Dj. toŋket <枕>, *la'ud: Jv (K, N). lod(an) <海の大魚>; In. laut <海>; Dj. laut <海の方へ>; Ho. (a) lotra <海>

しかし次のような音韻対応を示す例においては、これに *d を立てることはできず、それとは異なった *d̥ が措定せられる。⁴⁾

*d̥: Jv. d̥-, -d̥-, -d̥; Tg. l-, -l-, -d̥; Bt. d̥-, -d̥-, -r; In. d̥-, -d̥-, -r; Dj. d̥-, -d̥-, -r; Ho. r-, -r-, -tra.

Ho. では *d との区別がなく、又、Bt., In., Dj. においても語末音以外は *d との区別が行なわれないが、Jv. d̥, Tg. l̥ が現われることによって Jv. の d̥ を再構音として立てるのである。

*d̥i: Jv (K, N). d̥i <尊大な>; Tg. (ha) ligi <支柱>; Bt., In., Dj. d̥i <自身>; Ho.

(an)dri <柱>

*kəɖut: Jv(K, N). kəɖut <(織柄の)荒い>; Tg. kulot <縮れた>; In. kəɖut <しわ>; Dj. kedut <しわ>; Ho. kerutra <縮む事>

*kuɖʷ: Jv(K, N). kukud <引剥がす>; Tg. kudkod <むしる>; Bt., In., Dj., kukur <やすり>; *ha(n)təɖ: Tg. hatid <同行>; Bt. antar <給仕する>; In. antar <送届ける>; Dj. hanter(an) <持ってゆく>; Ho. atitra <届ける事>

このように *d との区別の指標は、語頭・語中の場合、Jv. ɖ, Tg. l によってつけられるが、語末の場合は、Jv., Tg. とともに -d であってそれは *d, *ɖ において区別がない。故に Bt., In., Dj. の語末音が、*-d か*-ɖ かを決める目安となる。

上に示した対応例によって、*d から *ɖ を分別する基本的な音韻対応関係は明らかであるが、実はこの対応関係から外れる例が多い。そのうち重要な点についての Dempwolff の説明は次のようになる。

1. Tg. danaw <沼>; In. danau <湖>; Dj. danau <池>; Ho. ranu <水>によって *danaw が描定され得るかの如く見えるが、一方、Tg. には lanaw <沼> の語もある。故に *ɖanaw を再構形とすべきで、Tg. danaw は *ɖ>d とした言語からの借用語である。⁶⁾ (尚、Kw. ranu <水溜>, 参照 V. 3.)

2. Jv. では *d, *ɖ がともに r となることがある。この場合、Tg. に対応例が見出せない、共通祖語の音は *d か *ɖ かは不明となる。故に Jv (K, N). ri <刺>; Bt., In. duri <刺>; Dj. duhi <刺>; Ho. rui <刺のある木>によって *[dɖ]uri' を両者の可能性を持つものとして描定する。⁷⁾

3. Jv. では *d に ɖ が当たることもある。それは Jv. の ɖ が現われる例に対して Tg. d-, -r- が対応することによって判断できる。

*dəpa': Jv(K, N). ɖəpə <尋>; Tg. dipa <尋>; Bt., In. dəpa <尋>; Dj. depɛ <尋>; Ho. refi <尋>

*gadiŋ <象牙>: Jv(K, N). gaɖiŋ <象牙>; Tg. gariŋ <象牙>; Bt., In. gadiŋ <象牙>

このような *d> Jv. ɖ の傾向は、Jv. における後天的な発音の結果であると Dempwolff は考えているようであり、そのことをオランダ語 dienst, ポルトガル語 roda が Jv. で ɖis <職務>, roɖə <輪> となる例によって示している。⁸⁾

以上の各項目については以下の本稿で再考するが、ここでは 3. について一言附しておく。要するに Dempwolff の考えでは、Tg. の d, l が *d, *ɖ 再構への決め手となり、その *ɖ の音価そのものは Jv. の音 ɖ から導かれたものであるけれども、Jv. の ɖ (及び r <*ɖ) は *d, *ɖ の両方にまたがって現われることになる。そして *d の場合の Jv. ɖ を、大体において後次的に獲得した借用語《Lehnwörter》の d を ɖ としたものとみなしているのである。この考えは、Dempwolff が ɖ を保持する言語が只単に Jv. のみであると思った点にも起因するのであろうが⁹⁾,

そのような例は多く、すべてをそれに帰するのは余程無理である。上記の *dis*, *roqo* のように借用・非借用のけじめが付け得る場合もあるが、それでは本来の **d* を受継いだ語は Jv. で *d* を保ち、一方、借用された *d* は Jv. で *ɖ* にしたのは何故なのかが当然問題とされなければならないであろう。しかし *ɖ* を保持する言語はひとり Jv. のみではない。Kw., Md. は *ɖ*(*dh*) を *d*(*dh*) と音素的に対立して持つ言語である。そして Kw., Md., Jv. がともに *ɖ* の対応を示す場合、Jv. の *ɖ* が借用語であると考えられ得る可能性は、ますます小さくなる。すなわち、それらの言語の *ɖ* は共通祖語において既に保有されていたと考えざるを得ないのである。ここに Tg. との音韻対応関係が改めて再考されなくてはならなくなり、又、Tg. による **d*, **ɖ* の峻別法が果して正当なものかどうかを検討される必要がある。これについて IV. で説くことになる。

III. Dyen の **D*

Dyen の **D* は Dempwolff の **ɖ* をただそのよう書替えだけであって理論的根拠が別にあるわけではなく、その再構音的性質は全く同じである。Dempwolff は Tg. の *l* (及び Jv. の *ɖ*) を基礎にして **ɖ* を立てたが、Dyen は母音間の **D* > Tg. *l* を認めつつも¹⁰⁾ **D* は Tg. の語頭・子音の後の位置で *d* になると考える。

語頭の場合、先の II. 1. で Dempwolff が借用語とみなした *lanaw* の異形 *danaw* のほか、Dyen は *lilim* <陰> に対する *dilim* <暗黒, 闇>, *luŋo* <苦悶> に対する *duŋo*? <内気な>, *lakip* <結合した> に対する *dakip* <摺む> の例を掲げて、後者の *d-*こそが **ɖ-* を引継ぐものとするのである。これに対して前者の *l-* は類推 (analogy) の結果による形であるとする。すなわち、彼はその形の由来について次のような説明を行なう：母音間の **D* が **l* に変化する時点において、母音で終る接頭辞 (**prV-*) と語頭音 **D* を持つ語根 (**Drt*) との結合が一般的であったと仮定することは正当である。しかも **prV-Drt* の結合において、**D* は母音間にあり、故に **l* となったのである。接頭辞の後の語根は、見かけの上で起原的に語頭音 **l* (**lrt*) を持つ語根との区別がつかない。かくして次のような類推が行なわれた。**prV-lrt* : **lrt* = **prV-lrt* (<**prV-Drt*) : **x*. このようにして **Danaw* から Tg. *lanaw* = *danaw* のような二重語 (doublets) が生じたのであり、前者は類推により、後者は (正規の——崎山) 音声変化によっている。¹¹⁾ つまり彼は *lanaw* の *l-* は、例えば接頭辞 **ma-* によって母音間に来たために **D* > *l* によって (**ma-Danaw*) できたものであるが、一方、例えば *malaki* <大きい> に対して *laki* (<**laki*?) <大きさ> があることに類推して *lanaw* を再構成したと考えるのである。しかしこの説明には納得できない。Tg. では接頭辞の後の語根の語頭音 *d* (すなわち、母音間の *d*) は *r* に変化することはあっても、例えば、*diin* <圧力> : *mariin* <重い>, *dupok* <もろさ> : *marupok* <もろい>, *l* に変えることはなく¹²⁾、又、*d* のままで変化しない場合すらある。*dahon* <葉> : *madahon* <枝の茂った>, *dugo*? <血> : *madugo*? <血まみれの>。このように彼の説明は、Tg. の言語事実と全く相反する。

子音の後の場合、例えば **linDuŋ* は Tg. *lindonŋ* <保護> となる一方、鼻音の接中辞 **-n* のない形からは **liDuŋ* > *lilonŋ* <保護> のように、語中の **D* > *l* によって、二つの語が生ずるとす

る。しかし *lindun の *-n- を接中辞とみなすのは、マライ・ポリネシア諸語における前鼻音化現象についての根本的無知に根差すものであって、この *n (実は *ŋ) は *d に対して同器官的に現われる鼻音にしかすぎなく、接中辞のような機能を持つものではない(VI. 参照)。又、例外的な *DasDas > Tg. laslas <皮をはいだ>などの例を説明するために彼は次のように述べる：単音節の重複形を持つ語においては、語頭音 *D が Tg. l で現われる時（その理由は上述したように類推による——崎山）、子音の後の *D は Tg. l となり、その場合以外は *D は Tg. d となる（上の *linDun > lindon のように——崎山）。¹³⁾ しかしこの説明にも同じく賛成することができない。*dat' dat' (= *DasDas) は註5に述べたように祖語再構形としては *dat' とすべきものであり、それが各言語において Tg. のような語根重複形、Dj. dadas(en) <擦りむいた>のように語頭音重複形として現われているのである。マライ・ポリネシア諸語の初期の段階では、単音節語それのみで有機的に機能していたことも考えられ、Dyen のいつているような重複形のみが元初的に存在していたわけではない。¹⁴⁾

又、Jv. の d が *d, *d の両方にまたがることについては、Dempwolff の借用語説に従っているようであり、この点については何の疑問をも呈出していない。¹⁵⁾

要するに *d, すなわち、Dyen の *D は、Dempwolff によって Jv. d, Tg. l に対して再構されたものであり、Dyen のように Tg. l をいじくれば、その瞬間において *d (= *D) の性質は変わるべきものである。再構形は、実体として存在する言語音から導かれた一つの仮構的 (fictitious) なものであり、そのような仮構的な再構形をそのままに留め置いて、それを導き出した現実の音を変えること自体、既に悖理であるといわねばならない。*d をそのままにして Tg. の l, d を問題にすることは許されない。ここに Dyen の理論の根本的欠陥（或いは彼にしか通用しない理論の展開）が存すると考えられる。尚、Dyen の説明に見られたように類推の傾向も言語における統一化の方向として確かに存在することは明らかではあるけれども、類推によって安易にすべての事柄を片付けようとする方法も、又、排斥せられなければならないのは比較言語学における一つの要請であろう。¹⁶⁾

IV. 諸言語における *d, *d の区別

次に Dempwolff の再構した *d, *d が諸言語において如何に現われているかを若干の例によって示す。空欄は不明、——は対応形の存在しない場合である。

	Jv.	Tg.	Sm.	Bg.	In.
(1) *dalan <道>	dalan (N)	daan	——	laləŋ	(jalan)
(2) *damaɾ <樹脂, 松明>	damar (N)	damag <夜>	(pa) damu	dama	damar
(3) *dəŋəɾ <聞く>	(k) ruŋu (N)	diŋig	roŋu	liŋə	dəŋar
(4) *da'un <葉>	ron (k)	dahon	ru	daun (rauŋ)	daun
(5) *dəpa' <尋>	dəpa (K, N)	dipa	rapa	rəppa	dəpa
(6) *daɾah <血> ⁷⁾	rah (k)	dugo?	re'u	dara (rara)	darah
(7) *datu' <家長, 王>	ratu (K, N)	dato?	ratu	dato (ratu)	datuk (ratu)

(8) * <i>[dɔ]uri</i> <刺>	(ə)ri (K, N)	—	ri'i	duri	duri
(9) * <i>dapur</i> <焔, 台所>	ɖapur (K, N)	dapog	—	dapo	dapur
(10) * <i>dakəp</i> <抱く>	dəkəp (K, N) <包む>	dakip	duku <抱く>	doko	dəkəp (dakap)
(11) * <i>ta(n)duk</i> <角>	tanduk (K, N)	tandok	kədu ¹⁷⁾	tanru	tanduk
(12) * <i>adu</i> <唆す>	adu (N)	aro	aru <怒り>	au	adu
(13) * <i>da(n)daŋ</i> <熱する>	dandaŋ (K, N) <釜>	daraiŋ	rara <赤い>	—	dandaŋ <釜>
(14) * <i>tu(n)duh</i> <示す>	tuduh (N)	turo?	—	tənru	tuduh
(15) * <i>t'uɭud</i> <退く>	surud (K, N)	—	hiri ¹⁸⁾	soro	surut
(16) * <i>[t]u'ud</i> <膝>	—	tuhod	—	utu ¹⁹⁾	(lu) tut
(17) * <i>udud</i> <喫煙する>	udud (K, N)	—	—	udu	udut
(18) * <i>ɖuwa</i> <二>	ro (N), (lo) ro (N) (da) lawa	dua	duwa	dua	dua
(19) * <i>ɖələm</i> <内, 深い>	daləm (K, N)	lalim	dalə	laləŋ	dalam
(20) * <i>ɖataɾ</i> <平らな>	(w) rata (N)	latag	(ma) rada	—	datar
(21) * <i>ɖiŋin</i> <寒い>	—	liŋin <旨い>	(ma) riŋu	—	diŋin
(22) * <i>tiɖur</i> (* <i>tuɖur</i>) <眠る>	turu (N)	tuɭog	todu (katuda)	tinro	tidur
(23) * <i>u(n)daŋ</i> <甲殻類>	uraŋ (uɖaŋ) (K, N)	ulaŋ	(k) uraŋ ²⁰⁾	uraŋ	udaŋ
(24) * <i>waɖa</i> <ある, ない>	ora (N) <ない>	wala? <ない>	nda <ない>	ala <ない>	ada <ある>
(25) * <i>huɖi</i> <後部>	(b) uri (N)	huli	—	uri	udi
(26) * <i>uɖan</i> <雨>	udan (N)	ulan	uraŋ ²¹⁾	urəŋ	(hu)jan
(27) * <i>paŋɖak</i> (* <i>piŋɖak</i>) <短い>	peŋdek (N)	pandak	pandaku ²²⁾	—	pendek
(28) * <i>paŋɖan</i> <阿檀>	paŋɖan (K, N)	panda	pandaŋ	panrəŋ	pandan
(29) * <i>kuɖ</i> <やすり>	kukud (K, N)	kudkod	kokuru <こする> ²²⁾	—	kukur
(30) * <i>hantaɖ</i> <見える>	antar (K, N)	hantad	ata(?)	atta <明瞭な>	antar <置く>

この例において明らかなように, In. では語末を除いて一切の区別が行なわれない *d* が, それ以外の言語では少なくとも何らかの方法で区別されて現われている。(メラネシア・ポリネシア語派に属する言語においてはこの間の区別は行なわれず同一の音となっている。²³⁾)

既に述べたように Dempwolff は Tg. の *d-*, *-r-*: *l-*, *-l-* によって **d*: **ɖ* を再構するから Jv. *d*, *ɖ* は両方にまたがる (Jv. *ɖ* が **d* に由来する時, Dempwolff は, 後次的に Jv. は *d* を *ɖ* としたと考えた。II. 3. 参照)。すなわち, Jv. *d-*, *-d-* (*-nd-*) は Tg. *l-*, *-l-* (*-nd-*)²⁴⁾ と対応する — (19), (26) — のみならず, Tg. *d-*, *-r-* (*-nd-*)²⁴⁾ とも対応し — (1) (2) (10), (11) (12) (13) (14) (17) —, 一方で, Jv. *ɖ-*, *-ɖ-* (*-nd-*) は Tg. *l-*, *-l-* (*-nd-*) と対応する — (23), (27) (28) —

のみならず, Tg. d-, -r(-nd)とも対応する——(5)(9)——。しかし同様に In. ですべて d となっているものを, Sm. では r と d とによって区別しており, それによるならば, Jv. d-, -d(-nd-) は Sm. r-, -r-と対応する——(12)(13)(26)——のみならず, Sm. d-, -d(-nd-) とも対応し——(2)(10)(19), (11)——, 一方で, Jv. d-, -d(-nd-) は Sm. r-, -r-と対応する——(5), (23)——のみならず, Sm. d-, -d(-nd-) とも対応する——(27)(28)——。そして Sm. の場合の範疇は Tg. の場合と異なる。つまり *d, *ḍ 決定の基準語として Tg. をとれば, それは Tg. における限りでの範囲を定めるのみであり, 共通祖語への普遍的な *d, *ḍ を再構し得るには至らないのである。このことは, もし Dempwolff が Tg. 以外の言語を比較に用いていたならば, *d, *ḍ を持つ再構形は, また違ったものになっていたであろうことを示唆する。*d, *ḍ の区別の仕方は各言語においてさまざまであり, Bg. のように複雑な様相を呈するものから, Ttb., Bs., Il. などのように Tg. より一層単純化している言語もある。例えば, Ttb. の場合, l と r の区別があるけれども, l が現われるのは (1)lalan, (23)ulanj のみであり, その他はすべて (2)rama, (5)rəpa, (6)rara', (7)ratu, (8)ru'i, (10)ra'kəp, (13)raraŋ<焙る>, (14)туру', (18)rua, (19)rərəm, (24)ore<ない>, (26)uran のように r で対応する。(又, Ttb. では Jv., Tg. とともに -d となる語末の *-d, *-ḍ について, -r で対応する。*tuŋkəd>təŋər<僧侶の杖>, *la'ud>laur<海>, (29)kokor<禿びた>, (30)anter。) Bs., Il. については Tg. と同じ子音の対応を示す (3)Tg. diŋig; Bs. duŋug; Il. deŋneg, (5)Tg. dipa; Bs. dupa; Il. deppa, (10)Tg. dakip; Bs. dakup; Il. dakep のほか, Tg. l, Bs. l に対して Il. が d 又は r で対応する (22) Tg. tulog; Bs. tulog; Il. turug, (24)Tg. walaʔ; Bs. walaʔ<ない>; Il. adda<ある>, *ḍiri'; Tg. (ha)ligi<支柱>; Bs. (ha)-ligi; Il. (a)diŋi[(a)rigi] がある一方, Tg. l に対し Bs., Il. とも d である場合がある。(19)Tg. lalim; Bs. dalum; Il. (a)dalem, (18)Tg. (da)lawā; Bs. duha; Il. dua。

このようにそのよるべき言語が異なればその範疇も異なるとすれば, Jv. 以外の他の言語に *d, *ḍ の分類基準を設けることは本質的にできないことになる。Dempwolff は Tg. にその根拠を求めたがために, Jv. d, ḍ には避け得ざる不安定性がつきまとったのである。又, (3)(4)(6)(7)(8); (18)(20)(22)(24)(25) に現われる r を *d, *ḍ の両方から由来する²⁵⁾と考えなければならなかった原因もそこにある。要するに, 個々の言語において *d, *ḍ は夫々違った風に発達させられてきたのであり, Jv. もその例に漏れないけれども, 明らかに近代の借用語の d を ḍ にしたものを除いて, Jv. の d, ḍ それ自身をもって起原的に共通祖語を受継ぐものとしなければならず, これは方法論として基本的に要請される事柄であろう。そしてここに Jv. のほかに, d, ḍ を保つ言語である Kw., Md. の重要性がある。(語末の -ḍ は Jv. のみならず Kw., Md. にも現われない。故に, 再構の方法として Dempwolff に一応従っておかざるを得ないであろう。)

V. マドゥラ語(Md.)のd, dh; ḍ, ḍh/カウィ語(Kw.)のd, ḍ

Md. は, Kw., Jv. において変化せしめてしまった共通祖語の音を比較的良好に保存する守旧的

な言語である。例えば、語頭の位置にある *ɣ は Kw. Jv. でゼロにする場合にも r を保つ(*ɣumah <家>:Md. roma;Kw. omah;Jv(N). omah, *ɣatut' <百>:Md.ratos; Kw. atus; Jv(K, N). atus) ほか, *b についても Kw., Jv. で w にしているものを b のまま保持している (*baɾu' <ハイビスカス>:Md. boru;Kw. warul;Jv(K, N). waru, *batu' <石>:Md.boto;Kw. watu; Jv(N). watu, *bəkat' <跡>:Md. bəkkas²⁶⁾; Kw. wəkas; Jv(K, N). wəkas)。又, d, ɖ についても, それらに対して音素的な意味を持つ帯気音 dh, ɗh を持ってはいるけれども, やはり祖語の音をよく保持していると考えられる。この帯気音は dh, ɗh のほか, ʃ, g に対しても jh, gh のように現われるが²⁷⁾, 帯気音を無帯気音との音素的対立のもとに持つ言語は, マライ・ポリネシア諸語にあって Md. 以外には見当たらず, たとえ共通祖語にこの帯気音を起原として引く可能性があっても, 比較言語学の方法論上, Md. のみによって祖語に帯気音を再構することは不可能である。すなわち, Md. 以外のすべての言語において, Md. の帯気・無帯気の区別は合一しており識別し得ないからである。但し, わずかに ɖələm <深い>: dholəm <家> の対立が Kw. の ɖalam(ɖələm) <内臓>: dələm <内, 深い>, Bsng. の dalam <深い>: haləm <内>によってそのよすがを留めているかに見えることを指摘しておく。祖語への再構は不可能であるにしても, そのような d, dh:ɖ, ɗh のそり舌, 非そり舌の関係は崩されることなく保たれ, 他の言語にその音韻対応を見出すことができる。²⁸⁾

1. 次に IV. 掲げた例に従って Md. の例を示すが, Md. は Jv. のように r 音化した語は見られず, Jv. r は Md. ɖ(ɗh) で対応する。

d(dh) 系列:(2)dhomar, (12)addhu<鼓舞する>, (13)dhəŋdhoŋ<釜>, (14)todhu<指示>, (17)oddhut(odhut)<阿片を吸う>。

ɖ(ɗh) 系列:(3)ɖəŋŋər, (4)ɖəun, (5)ɖəppa, (6)ɖəɾə, (7)ɖhoto, (8)ɖuri, (9)ɖəpor, (10)ɖhəkkəp, (11)tanɖu?, (18)ɖuwo, (19)ɖələm<深い>, (21)——, (22)teɖuŋ, (23)oɖəŋ, (24)bəɖə<ある>, (25)buɖi, (27)panɖə?(penɖə?), (28)panɖən。

(尚, 語末については, In. と同じく -t と -r による区別がある。(15)sorot, (16)to'ot, (17)oddhut, (29)korkor<搔く>, (30)antər。又, (1), (26)についても In. と同様な ʃ が現われる, jholon, ojhon。Dempwolff は, 故に*d'alan, *ud'an の再構形をも立てる。²⁹⁾)

上の例によって分かるように, Jv. の r はすべて Md. ɖ(ɗh) であることから, Jv. r は Dempwolff が考えたように *d から由来するものではないことが明らかである。

2. Jv. に見られた *ɖ>r は Kw. において既に現われている。(3)rəŋö, (4)ron(rwan), (6)rāh³⁰⁾, (7)ratu, (18)rwa, (20)ratā, (22)turū, (23)huraŋ, (24)wwara<ある>, (25)wuri。又, Jv. と同じく (5)ɖəpa, (9)ɖapur, (27)panɖak, (28)panɖan のように ɖ, (1)dalan<手段>, (2)damar, (12)adu<争う>, (13)daŋdaŋ<鍋>, (14)tuduh, (26)udan のよう d を保つ場合のほか, (7)ɖatu, (8)ɖuri, のように Jv. r に対して古音をまだ残している場合もある。但し, ɖatu; ratu, 又, ɖarat<足, 足場>; rāt<世界>³⁰⁾ (Jv[K, N]. ɖarat, Md. ɖhərət[dhərət]) のよう

に *ɖ* 及びその変化した音 *r* がともに存在する例もあり、このような *ɖ>r* の起こり始めた時期に、Md. は「原ジャワ語」とも呼ばれるべきマライ・ポリネシア諸語における一つの下位的な祖語から分岐したのである。

3. Md. には Kw., Jv. より余程その例も少ないけれども、(7) *ɖhɔto; rato*, (10) *ɖhəkkəp; rəkkəp* のように両形がある場合のほか、(20) は *rata* のように、又、*rano*〈湖〉(Kw. *ranu*〈水溜り〉, In. *danaw*〈湖〉) の例がある。しかしこれらに対しても **ɖ* を立て得ることは、先の説明によって明らかであろう。

尚、同じく「原ジャワ語」から派生した OB. においては、既に **ɖ* は *d* となってそのそり舌音性を失ない、又、**d* は *d* となって In. のように合一してしまっているが **ɖ* に対しては *r* も *d* とともに現われることが多く、ここにも **ɖ>r* の現象が見られる。同じく IV. の例に従って、(2) *damar*, (3) *dəŋər*, (4) *don; ron*, (5) *dpa*, (6) *darah; rāh*, (7) *datu; ratu*, (10) *dakap*, (11) *tanduk*, (13) *daŋ*〈台所用具〉, (14) *tuduh*, (18) *dua; rua*, (19) *dalm(bunut)*〈(総督の)居所〉, (20) *datar*, その他、*danu; ranu*〈湖〉。但し、Bl. でも、OB. の **ɖ>d* とともに **ɖ>r* をも受継いでいる場合があり——(18) *(da) dua; rwa, daet; rat*〈土地, 国〉——, 又、*don*〈葉〉; *ron*〈砂糖椰子の若葉〉, *padem*〈死んだ〉; *merem*〈横たわる〉(Kw. *paɖəm*〈消える, 死ぬ〉, 但し、Jv. においても *paɖəm*[K]〈死んだ〉; *mərəm*[K, N]〈眼を閉じる〉) のように *d*, *r* に意味的弁別を行なわせる機能を新たに発生せしめたほか、Jv. と同様に Bl. にもある階級別言語差に活用して³¹⁾ *idup*(N); *urip*(K)〈生きる〉(Kw. *hurip*〈生きる〉, Md. *iɖup, oɖiʔ*〈生きる〉, Jv[N]. *urip*[iɖop]〈生きる〉), *di*(N); *ri*(ŋ)(K)〈…で, に〉(Kw. *ri*[ŋ], Md. *ɖi*, Jv[N, K]. *ri*[ŋ]〈…で, に〉) のように使分けている例もある。

4. Jv. において近代の借用語が *d* を持つ場合、それを *ɖ* にする傾向があったが、同じ傾向は Md. にも見られる。次のようなオランダ語からのもの、*ɖirektur*(directeur)〈支配人〉, *ɖoktər*(docter)〈医者〉, *ɖinəs*(dienst)〈職務〉, *ɖek*(deken)〈毛布〉, *ɖuwit*(duit)〈銅貨の一種〉, *ɖipan*(divan)〈長椅子〉, *ronɖɔ*(ronde)〈巡回〉に加えてマライ語からの *ɖɔri*(h)(dari)〈…から〉, *ɖimma*(h)(dimana)〈どこに〉のような例もある。既に Jv. の借用語について述べたように(II. 3. 参照)これらの語も借用語であることは明らかであって問題はないが、Dempwolff のように不規則的対応の解決のために安易に借用に帰するような方法をとってよいならば、世にこれ程簡単な比較言語学の方法はないであろうと思われる。

Md. の *ɖ*(*ɖh*) は、一部において既に *r* 音化している語もあったけれども、Kw., Jv. と明瞭な音韻対応関係を示した。ここにマライ・ポリネシア諸語の **ɖ*, 更に **d* の再構の作業は Md. を基礎にして進められなければならない。又、Kw., Jv. の順に **ɖ>r* の著しいそれらの言語は、Md. の補助的言語として再構に役立つであろう。そして更に Tg. の *l*, *d* についても根本的にそれらの言語への対応の仕方を考え直さなければならない。

VI. 前鼻音化現象による解決

前鼻音化現象《Pränasalierung》とはマライ・ポリネシア諸語に一般的・共通的に存在した現象であって、共通祖語的には次の12種類の破裂（閉鎖）音・破擦音に対してそれと同器官的《homorganisch》な鼻音がその前に現出した形を指定し得る。

*b~*mb, *p~*mp; *d~*nd, *t~*nt; *ɖ~*nɖ, *t̪~*nt̪; *d'~*n'd', *t'~*n't'; *g'~*ŋ'g', *k'~*ŋ'k'; *g~*ŋg, *k~*ŋk.³²⁾

この現象はポリネシア語派の言語にあっては痕跡的にしかその跡を残さないが³³⁾、インドネシア語派の言語では、以上の祖語形を継承しつつ、それは具体的に鼻音代償《nasaler Ersatz》、鼻音増加《nasaler Zuwachs》となって現在も活用せられている。この形態音韻論的現象の機能については、現在、最早それを明らかにすることはできないがその発生時においては「強調」《Intensivierung》を表わした³⁴⁾ものと考えられ、故に、この現象を起す・起さないに関しては恣意《fakultativ》性があった。又、そのような意味に関与する強調の機能があったことは、意味に無関係な個々の単音に対しては決して起こらず、従って語末音にこの現象が現われることはない。又、語中の場合には、かつての単音節的な語根が更に他の接頭辞（又は、他の語根）と結合して

	Md.	Kw., Jv.	Tg.	Sm.
*d	d- -d- -t	d- -d- -d	d- -r- -d	d- -d- ∅
*nd	— -nd- —	— -nd- —	— -nd- —	— -d-(-r-) —
*ɖ	ɖ- -ɖ- -r	ɖ-(r-) -ɖ-(-r-) -d	l- -l-(-r-) -d	r- -r- ∅
*nɖ	— -nɖ- —	— -nɖ- —	d- -nd- —	d- -nd-(-d-) —
	Bg.	In., Bt., Dj.	Ho.	
*d	d- -d- ∅	d- -d- -t	r- -r- -tra	
*nd	l- -nr- —	— -nd- —	— -ndr- —	
*ɖ	r-(l-) -r-(-l-) ∅	d- -d- -t	r- -r- -tra	
*nɖ	d- -nr- —	— -nd- —	— -ndr- —	

i) —はその部分に該当音が現われないこと、∅はゼロが現われることを示す。すべてに共通して *nd, *nɖ は語末には現われない。

ii) 語末の *ɖ は Md., Kw., Jv. において ɖ としては現われず、再構の方法は Dempwolff に従っている。

iii) In., Bt., Dj., Ho. は *d, *nd; *ɖ, *nɖ に関して区別がない。

iv) Bg. はその音の現われ方が複雑・多様であって、ここに示した対応音は一応の原則的なものである。

v) Tg. l は y, h, ∅ になることがある。³⁶⁾

新たな一語を形成した時に、この現象を起したことを痕跡として語中に残している例を数多く見出すことができる。例えば、In. səpit<狭い>に対する səmpit <狭い>, piʝak <踏む>に対する pinʝak <踏む>など、後者はこの現象の痕跡を示しているが、意味的には何の区別も最早行なわれていない。Dempwolff は、Tg. の語中の -nd- は *-nd-, 又は、-*nd-に由来するとしたが、そのような再構音に近い音的性質を保つ場合のほか、メラネシア語派のトラック語のように *nt, *nd, *nt, *nd, *n't, *n'd', *ŋ'k', *ŋ'g' をすべて ts'に変えているような一見激しい音韻変化を行なった言語もある。³⁵⁾ 要するに、比較言語学的には再構音の性質に拘泥することなく、この前鼻音化現象の変化を各言語において如何に位置づけ説明するかが方法論上の重要な要請となる。

次に Md. d(dh), ɖ(ɖh) によって立てられた再構音 *d, *ɖ 及びその前鼻音化現象形 *nd, *nd に対する各言語の対応音を前頁に示す。

本稿に引用した Dempwolff のすべての再構形を Md. によって検討し直した結果の新たな再構形は次のようになり、又、その再構形への前鼻音化現象の有無によって、上に掲げた表における各言語の音の発現の仕方が理解せられるであろう。(見出しの数字は本稿の章を示す。)

Dempwolff 形		訂正形	
II. *damaɾ	変化なし	Md. dhɔmar<明り, 樹脂>; Kw. damar	
*tu(n)duh	//	Md. todhu<指示>; Kw. tuduh<示す>	
*tu(ŋ)kəd	//	Md. toŋkət<杖>	
*laʼud	//	Md. laot<海>	
*ɖiriʼ	//	Md. dhiriʼ<自身? ²⁸⁾ >; Kw. ɖiri<立つ>; Jv(N, N). ɖiri	
*kəɖut	//	Md. — ; Jv(K, N). kəɖut	
*kuɖ	//	Md. korkor<搔く>	
*ha(n)təɖ	//	Md. antər<案内する>	
*ɖanaw	//	Md. rano<湖>; Tg. lanaw(*ndanaw>Tg. danaw)	
*[dɖ]uɾiʼ	*ɖuɾiʼ	Md. ɖuri<刺>; Kw. ɖuri	
*dəpaʼ	*ɖəpaʼ	Md. ɖəppa<尋>; Jv(K, N). ɖəpə; *ndəpaʼ>Tg. dipa	
*gadiŋ	*gaɖiŋ	Md. ghəɖɖhiŋ<象牙>; Kw. gaɖiŋ; Jv(K, N). gaɖiŋ	
III. *ɖəɖəm	変化なし	Md. — ; Tg. lilim(*ndəɖəm>Tg. dilim)	
*ɖəŋuʼ	//	Md. — ; Kw. rəŋu<不気嫌な>; Tg. luŋo(*ndəŋu>Tg. duŋoʼ)	
*ɖakəp	//	Md. ɖhəkkəp<腕を組む>; Jv(K, N). (si)ɖakəp<腕を組む>; Tg. lakip(*ndakəp>Tg. dakip ³⁷⁾ >; Sm. rakap<掴む>	
*li(n)ɖuŋ	//	Md. lenɖuŋ<保護する>; Kw. liŋɖuŋ; Jv(K, N). liŋɖuŋ; Tg. lindon(*liɖuŋ>lilon)	

IV. *dalan,*d'alan	〃	Md. jhɔlɔn<道>; Kw. dalan<手段>
*dəŋəɾ	*dəŋəɾ	Md. dəŋŋəɾ<聞く>; Kw. rəŋö; *ndəŋəɾ>Tg. diŋig
*da'un	*da'un	Md. ɖoun<葉>; Kw. ron(rwan); *nda'un>Tg. dahon
*daɾah ⁷⁾	*ɖaɾah	Md. ɖoro<血>; Kw. rāh; *ndaɾah>Tg. dugo [?]
*datu'	*ɖatu'	Md. ɖhoto(rato)<王>; Kw. ɖatu(ratu); *nda [?]
*dapuɾ	*ɖapuɾ	Md. ɖopor<台所>; Kw. ɖapur; *nda [?]
*dakəp	変化なし	Md. —; Jv(K, N). dəkəp
*ta(n)duk	〃	Md. tanɖu ³⁸⁾ ; Jv(K, N). tanduk
*adu'	〃	Md. addhu<鼓舞する>; Kw. adu<争う>
*da(n)daŋ	〃	Md. dhɔŋdhɔŋ<釜>; Kw. daŋdaŋ<鍋>
*t'uɭud	〃	Md. sorot<退潮>; Kw. surud<退く>
*udud	〃	Md. oddhut(odhut)<阿片を吸う>
*[t]u'ud	〃	Md. to'ot<膝>
*ɖuwa'	〃	Md. ɖuwa<二>; Kw. rwa; *nda [?]
*ɖaləm	〃	Md. ɖələm<深い>; Kw. ɖalam(ɖaləm)<内臓>
*ɖataɾ	〃	Md. rata<平らな>; Kw. ratā
*ɖiŋin	〃	Md. — ³⁹⁾
*tiɖuɾ(*tuɖuɾ)	〃	Md. teɖuŋ<眠る>; Kw. turū; *tuɖuɾ>Sm. todū
*u(n)daŋ	〃	Md. oɖəŋ<海老>; Kw. hurəŋ
*waɖa'	〃	Md. boɖə<ある>; Kw. wwara; *wwaɖa'>Sm. nda
*huɖi'	〃	Md. buɖi<後>; Kw. wuri<裏>
*uɖan,*hud'an	〃	Md. ojhɔn<雨>; Kw. udan
*pa(n)ɖak (*piɖak)	〃	Md. paɖə [?] (penɖə [?])<短かい>; Kw. paɖak<低い>
*pa(n)ɖan	〃	Md. paɖɔn<阿檀>; Kw. paɖan
V. *ɖarat	*ɖarat	Md. ɖhɔɾət(dhɔɾət)<陸>; Kw. ɖarat<足場>(rāt<世界>)
*paɖəm	*pə(n)ɖəm	Md. pəddhəm(məddhəm)<眼を閉じる> ²⁸⁾ ; Kw. paɖəm<消える, 死ぬ>; Jv(K). paɖəm<死ぬ>(Jv[K, N]. məɾəm<眼を閉じる>); Tg. param<消える>; In. padam<消えた> ⁴⁰⁾
*huɖip	変化なし	Md. iɖup(oɖi [?])<生きる>; Kw. hurip; Jv(N). urip(iɖop)
*ɖi'	*ɖi'	Md. ɖi<…で, に>; Kw. ri; Jv(N,K). ri(ŋ); *nda [?]
		d(ito)<こと>

以上の対応によって Dempwolff の *d に対する Jv. ɖ の借用語説, Dyen の *ɖ に対する Tg. l の類推説などもすべて, 解消もしくは合理的に説明し得られるようになる。そして更に Dempwolff の再構形の *d, *ɖ を含む語全般にわたって, Md., Kw. による再検討が加えられなければならない

い。

VII. おわりに

Md. はマライ・ポリネシア諸語比較言語学において、特にその基礎的作業を行なうに当ってインドネシア語派の中で重要な位置を占めることが明らかであるが、*d, *ḍ のみならず Dempwolff の他の再構音に対しても根本的な問題を提起する場合がある。最後にその一例を示しておく。

例えば語中において Jv. -r-; Tg. -l-; In. -d-; Dj. -r-; Ho. -r- の対応をする 次のような例がある。

Jv(K, N). iruŋ<鼻>; Tg. ilonŋ; In. hiduŋ; Dj. uroŋ; Ho. uruna

この語中の音に対して、一見その再構音として *ḍ を指定し得るかに見える。しかし、Bt. では iguŋ であって -g- が現われる。故に、語中音が -d- とならない Bt. があることによってここに *ḍ を立てることはできず、新たな別の再構音を設定しなければならない。Dempwolff はこれを -*g'- とし、上例は *ig'uŋ となる。語末の場合も同様であって、Jv. -r; Tg. -d; In. -t; Dj. -r (-t); Ho. -tra の対応において Bt. は -k をもって現われるから、これに対する再構音も -*g' とする。

*bəlag': Jv(K, N). wəlar<広い>; Tg. bilad<陽に晒された物>; In. bəlat<罌の一種>; Dj. belat<漁網>; Ho. velatra<広げる>; Bt. bolak<広い>

このように Bt. が基準言語(criterium-language)となって *g' が再構せられる。(*g' が語頭に立つような各言語間の音韻対応は見出されない。故に *g' は語中・語末にのみ現われる。⁴¹⁾ この *g' と再構された音に対して Md. は原則的に -l-, -r で現われる。先の *ig'uŋ, *bəlag' に対して elonŋ<鼻>, bəlar<広げる>となるほか、

*bag'ah: Md. bəbə<知らせる>; Jv(K, N). warah<指導>; Tg. balaʔ<警告>; Dj. baraʔ<軽薄をやめさせた>; Ho. (am)bara<語られた>; Bt. бага<約束>

*kunig': Md. koner<鬱金>; Jv(K, N). kunir<鬱金>; In. kun'it<鬱金>; Dj. kun'it<鬱金>; Ho. hunitra<染料を取る植物の一種>; Bt. hunik<鬱金>

のような例もある。しかし次のような Jv. -ḍ- が現われる例に対して、Dempwolff は借用した In. -d- をそり舌音化した⁴²⁾ と考えるが、Md. は -l- で対応する。

*a(ŋ)g'i': Md. aleʔ<弟, 妹>; Jv(K, N). aḍi(k)<弟, 妹>; Tg. ali<伯(叔)母>; In. adik<弟, 妹>; Dj. adiʔ<弟, 妹>; Ho. andri<弟, 妹>; Bt. anŋi<弟, 妹>

一方、Kw. の ari<敵; 弟, 妹>は aḍi(k) に対応すると考えられ、とすると、既に明らかにしたように ḍ>r はあっても、r>ḍ は考えられないことから、あるいは Dempwolff の説のように In. の -d- を -ḍ- としたのかもしれない(II. 3. 参照)。しかし *g' の再構形に対して Md. -ḍ- が現われる場合がある。

*pag'ay: Md. paḍi<稲>; Jv(N). pari<稲>; Tg. palay<稲>; In. padi<稲>; Dj. parəi<稲>; Ho. fari<甘蔗>; Bt. page<稲>

この場合も Kw. pari<稻>, 又, Bl. padi<稻>は Md. の -d- に対してそれを再構音 *d̥ として立たしめる傍証となり得ない。すなわち, Bt. -g- によって *g' を立てる限りこの Md. -d- も例外的な現象としなくてはならないかと思われる。但し, *g' に対して現われる Md. の例外音は -d- のほか -r- の場合もあり, *g' の性格はそれ自体, 既に非常に不安定なものであったことが分かる。そしてこのような不安定性は *r' についても見られた。⁴³⁾

*ag'əŋ: Md. arəŋ<炭>; Jv(K, N). arəŋ<炭>; Tg. aliŋ(asaw)<不快な(炭の)臭>; In. araŋ<炭>; Dj. ariŋ<消炭>; Ho. arina<炭>; Bt. agoŋ<炭>

*pəg'u': Md. (ə)m pədu<胆汁>; Jv(K, N). (am)pəru, (rəm)pəlu; Tg. apdo⁴⁴⁾; In. (am)-pədu; Dj. pero; Ho. (a)feru; Bt. pogu

註

- 1) その一例, Dyen, I. 1953: Dempwolff's *R, *Language*, 29, 3, pp. 359-66. その反論, 泉井久之助 1955: 「比較言語学における 共通音韻 定立の限界——マライ・ポリネシア語に於ける *r' について——」『言語研究』, 28, pp. 10-18. 又, Dyen, I. 1953: *The Proto-Malayo-Polynesian Laryngeals*, Baltimore. その反論, Uhlenbeck, E. M. 1955-56: *Lingua*, 5, pp. 308-18.
- 2) Dempwolff, O. 1934: *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes*, I. Band, Berlin, p. 43, pp. 67-68.; 1937: II. Band, Berlin, p. 18, p. 50, p. 81.
- 3) ジャワ語には上層語(Krama)・下層語(Ngoko) の大きな二つの区別がある。その語彙的相違を K, N によって示す。両者に共通する場合は, K, N と記す。
- 4) Dempwolff, 1934, p. 62-63, p. 68.; 1937, p. 18, p. 50, p. 81.
- 5) Dempwolff, 1938: III. Band, Berlin, p. 82. 彼は再構形に *kuḍkuḍ を立てるが, Tg. は語根重複形, Jv., Bt., In., Dj. は語頭音重複形であって, 再構形としては *kuḍ のみでよい。以下, 同様の例については一々註記しないが, この解釈に従った再構形を掲げる。
- 6) Dempwolff, 1934, p. 79.
- 7) Dempwolff, 1934, p. 91. そこで同じく彼は *[d̥]ar[aə]h の形も掲げている。Jv(K). rah<血>; Bt. dareh<血>; In. darah<血>; Dj. daha<血>; Ho. ra<血>の対応によったのだらうが, 彼は Tg. dugo?<血>に気付かなかったのである。彼の解釈に従えば, この再構形は, 当然, *daɾah(*d̥əɾəh) とするべきものになる。又, (8) の *duɾi' も同様であって, Dempwolff は *[d̥]uɾi' としているが, これは Tg. にその対応例がないためである。しかし, 同じくフィリッピン語では *d̥>l, *d̥>d の関係において duyī<魚の背骨>, Il. duri<刺>があるから, Dempwolff の解釈からすれば, 語頭音は *d とすべきことにある。Costenoble, H. 1940: Die Lautwandlungen des Tagalog, *B. K. I.*, 99, 1, pp. 65-87.
- 8) Dempwolff, 1934, p. 89.
- 9) Dempwolff, 1934, p. 62.
- 10) Dyen, I. 1947: The Tagalog Reflexes of Malayo-Polynesian D, *Language*, 23, 3, p. 229.

- 11) Dyen, 1947, p.233.
- 12) Bloomfield, L. 1917; 2nd ed. 1967: *Tagalog Texts with Grammatical Analysis*, Illinois, p.213. Крус, М. и Шкарбан, Л. И. 1966: Тагалийский Язык, Москва, pp.17-18.
- 13) Dyen, 1947, p.235.
- 14) Dempwolff, 1938, p.63. にある *hiḍam: Tg. hilaṃ<眼を突刺すような>; Jv(K, N). iḍam<熱望>; In. idam<熱望>; Dj. (k)idam<熱望>についても *ḍam がさらに古い語根であることを In. dāḍam<恋慕>, pāḍam<抱懐する>等によって知ることができる。このような例は他にも数多く指摘することができる。
- 15) Dyen, 1947, p.229.
- 16) Meillet, A. 1958: *Linguistique historique et linguistique générale*, Paris, pp.130-148.
- 17) Savu 方言 tadu.
- 18) 意味は<引張る>。母音が不規則的。但し, Tarimbang 方言では (ka)heri. 尚, Sm. h は In. s に規則的に対応する。huhu: susu<乳>, tehiku: tasik<海>, haḍi: sapi<牛>, ihi: isi<内容>。
- 19) utu の t は *-d に対応するものではない。(14) の場合と同じく, 語末は再構形に対してゼロである。Dj. utut<膝>参照。
- 20) Kodi 方言 kura.
- 21) Laora・Memboro 方言 uru.
- 22) Sm. において語末に -u を持つ語は, 共通祖語の語末子音を保持している場合が多い。
nomu: In. (ə)nam<六>, ŋoŋu: In.(ma)kan<食べる>, tehiku: In. tasik<海>。
-u の機能は, 現在, 明らかにすることはできないが, 恐らく古い接尾辞であり, それが固着した語は語末子音を落さなかったのである。
- 23) 泉井久之助 1958: 「マライ・ポリネシア諸語」『世界言語概説』, 下巻, pp.1023-1027.
- 24) *nd, *ṇḍ は Tg. で -nd- となる。この前鼻音化現象については, 更に VI. 参照。Dempwolff, 1934, pp.97-100.
- 25) Dempwolff, 1934, pp.89-92.
- 26) このような子音重複現象 (gemination) は Md. に特異な現象で, 語中の子音において見られる。tappor<稻妻に打たれる>, təbbhu<甘蔗>, pəttəŋ<暗い>, bhəddhil<鉄砲>, rəkkaʔ<粘る>, rəggen(オランダ語 regent)<総督>, rəgghə<値段>, tannəm<植える>, ləŋŋən<腕>, təllor<卵>, ghəḍḍhiŋ<象牙>, əssaʔ<一>など。但し, この現象を起さない語もあり, 起す語との相違は明らかでない。ロマンス諸語においてもイタリア語にはラテン語から引起した特に顕著なこの子音重複現象の例が見られる。Elcock, W. D. 1960: *The Romance Languages*, New York, 特に pp.465-.
- 27) 例えば, jəgə<目覚める>: jhəghə<立つ>, kaḍəŋ<後に傾く>: kaḍəŋ<ニッパ椰子の筵>, bəbə<の下に>: bhəbə<地区>, sombəŋ<兎唇>: sombhəŋ<救助>, dəḍə<全力で>: dhəḍə<全体の>, bəḍən<仕事の荒い>: bhəḍən<体>, ḍəḍə<北>: ḍəḍə<北風>, kaḍəŋ<親族>: kaḍəŋ<時々>など。このような帯気音には, 二次的・後次的に無帯気音から分裂 (splitting) してできたものもあるであろう。守旧性のある一方で, 先の子音重複現象とともに Md. にはまたこのような革新性もある。
- 28) 但し, dhiriʔ<自身>, pəddhəm(məddhəm)<眼を閉じる>など, そのそり舌音性を失なっ

たことが明らかな例がある。それは Kw. *ḍiri* <立つ>; Jv(K, N). *ḍiri* <尊大な>, Kw. *paḍəm* <消える, 死ぬ>, Jv(K). *paḍəm* <死ぬ>などによって判明する。故に再構に当って Kw., Jv. との対応関係を調べることも重要な作業となる。

29) Dempwolff, 1937, p. 118, p. 121.

30) この語頭の r- は Dempwolff の **daṛah* の **r* に当るものではなく, **d* に由来することが長母音 *ā* によって明らかである。すなわち, **r* がゼロになることによって母音の代償的な延長 (compensatory lengthening) が起こったのである。Jv. ではそのもとの機能が忘れられて長音性を落し *rah* とする。

31) Kersten, J. 1948: *Balische Grammatica*, 's-Gravenhage, p. 10., Kersten, J. 196?: *Garis Besar Tatabahasa Bali*, Denpasar, pp. 6-7.

32) Dempwolff, 1934, pp. 30-34.; 1937, pp. 7-12.

33) 泉井久之助 1962: 「言語比較における音韻対応関係設定の不確定性について——印欧語と主としてハワイ語に関して——」『言語研究』, 41, pp. 1-13.

34) Dempwolff, 1937, p. 8.

35) Izouï, H. 1941: Un coup d'œil sur la langue *ts'uk*. II, 『言語研究』, 7/8, pp. 34-46.

36) **d* は Tg. において *l* 及び *y*, *h*, *ø* に分裂 (splitting) を起した可能性がある。

**huḍi'*: *huli* <遅い, 終の>; *uhi'*, *ui'* <帰路>, **ḍuk*: *luklok* <坐る>; *yukyok* <蹲る>, **ḍakəp*: *lakip* <結合した>; *yakap* <結んだ>, **ḍaku'*: *liko'* <曲った>; *yuko'* <屈む>。

このように Tg. の *l* はそれ自体, 非常に不安定である。Costenoble, 1940, pp. 72-77.

37) Tg. *dakip* は以下に掲げる **ḍakəp* に由来する可能性もある。

38) Md. *tanḍu'* の *ḍ* は稀な例外的現象である。Kw. にもその対応例は見当たらず, Jv. によって再構されるほかはない。

39) これに対して Md. のみならず Kw., Jv. においても対応する語がない。只, Tg. *liḡin* <美味の, 旨い>; Sm. (ma)*riḡu* <寒い>によって一応 **d* を再構せざるを得ない。

40) Dempwolff, 1938, p. 110. の再構形 **padəm* <消える> は大きな誤りの一つである。この由来形として Tg. *param*; In. *padam* のほか, Bt. *pidom* <絶滅>; Jv. *parəm* を掲げ, Jv. *parəm* に <痛みを鎮める>の意味を記入している。しかし Jv(K, N). *parəm* は <膏薬の一種> のことであり, それには In. *param* <膏薬> が対応する。Jv. *parəm* は In. *padam* と対応する語ではない。この Jv., In. に対して強いて再構形を立てるならば, それは **paṛəm* である。Tg., Bt. の形は **pə(ṇ)ḍəm* に由来すると解釈しなければならない。但し, **pə(ṇ)ḍəm* を Dempwolff は別に立ててはいる。Dempwolff, 1938, p. 116.

41) Dempwolff, 1934, p. 55, p. 68, pp. 72-73.; 1937, p. 18, p. 50, p. 80.

42) Dempwolff, 1934, pp. 91-92.

43) 1) の泉井久之助論文参照。

44) この Tg. の例外音 -*d*- については, Dempwolff, 1934, p. 80.

— 諸言語引用参考文献 —

全体的には 2), 5) に記した Dempwolff の三部作によるところが大きいが, それでも筆者の

見解による訂正を加えて例を掲げた場合も一々註記はしなかったが少なくない。又、

Lopez, C. *Studies on Dempwolff's Vergleichende Lautlehre des anstronesischen Wortschatzes*. Manila, Institute of National Language, 1939.; Mimeographed ed., 196?.

もその再版を見ることができた。しかしこれは要するに上記 Dempwolff の抄訳であり, Lopez 自身の *Studies* が特にあるわけではない。又, Dempwolff の一・二部に当る部分は Dempwolff の再構音をそのまま引用してあるが, 三部の単語集は Dyen 式音素表記に従っている。故に, 全体を通じて利用しようとする人には繁雑となる。誤訳・誤植の箇所も散見するから注意を要する。

古代ジャワ語=カウィ語(Kw.)

Juynboll, H. H. *Oudjavaansch—Nederlandsche Woordenlijst*. Leiden, 1923.

最近出版されたばかりの次の辞書はカウィ語学に対するやはり一つの大きな貢献といえる。掲載語数も Juynboll のより大分増えている。しかし Juynboll にみられた出典を一切省いてしまったのは、遺憾の点の一つであり、又、タイプ印刷のため不鮮明の箇所もかなりある。

Wojowasito, S. dan Santoso, S. *Kamus Kawi(Djawa Kuno)—Indonesia*. Malang, 1969.

現代ジャワ語(Jv.)

数多い資料のうちで次が最も優れている。

Poerwadarminta, W. J. S. *Baoesastra Djawa*. Groningen-Batavia, 1939.

Pigeaud, Th. *Javaans—Nederlands Handwoordenboek*. Groningen-Batavia, 1938.

古代バリ語(OB.)

Goris, R. *Prasasti Bali* I, II, Bandung, 1954.

現代バリ語(Bl.)

I Gusti Ananda Kusuma. *Kamus Bali—Indonesia*. Denpasar, 1956.

I Gusti Ananda Kusuma. *Kamus Indonesia—Bali*. Denpasar, 1956.

マドゥラ語(Md.)

マドゥラ語の音素的なそり舌・非そり舌, 帯気・無帯気音の区別を最も忠実に再現しているのは、それぞれ表記の仕方は異なるが次の二書である。

Kiliaan, H. N. *Madoereesch—Nederlandsch Woordendoek* I, II. Leiden, 1904, 1905.

Penniga, P. en Hendriks, H. *Practisch Madureesch—Hollandsch Woordenboek*. Soerabaia-Den Haag, 1913.

ところが後者の再版('s-Gravenhage-Semarang, 1937.) ではそのような音素的区別のある音を d, dh, d, dh に関して d と dh, d, dh との二組の対立に分けて統一し, 不正確にしてしまっている。そして次の書の表記もこの二組に還元された方式によっている。

Penniga, P. en Hendriks, H. *Practisch Nederlands—Madurees Woordenboek*. 's-Gravenhage-Semarang, 1937.

この簡易方式はインドネシア 初等教育省から出版されているマドゥラ語 教科書にも採用されているが、このような不精密な表記法に対して批判がでていいるのは当然である。

Uhlenbeck, E. M. *A Critical Survey of Studies on the Languages of Java and Madura*. 's-Gravenhage, 1964, p. 177.

要するに、最初に掲げた二書以外に基本的にはよるべきではない。

インドネシア語(In.)

最も文献の多いこの言語については省略する。

ホヴァ語(Ho.)

Richardson, J. *A New Malagasy—English Dictionary*. Antananarivo, 1885.; 2nd ed. 1967.

Корнеев, Л. А. *Мальгашско—Русский Словарь*. Москва, 1966.

カロ・バタク語(Bt.)

Neumann, J. H. *Karo-Bataks—Nederlands Woordenboek*. Medan, 1951.

Joustra, M. *Karo-Bataksch Woordenboek*. Leiden, 1907.

ンガジュ・ダヤク語(Dj.)

Hardeland, A. *Dajacksch—Deutsches Wörterbuch*. Amsterdam, 1859.

尚, Scott, N. C. *A Dictionary of Sea Dayak*. London, 1956. も参照した。

ブサン語(Bsng.)

Barth, J. P. J. *Boesangsch—Nederlandsch Woordenboek*. Batavia, 1910.

トンテムボアン語(Ttb.)

Schwarz, J. A. T. *Tontemboansch—Nederlandsch Woordenboek*. Leiden, 1908.

ブギス語(Bg.)

Matthes, B. F. *Boegineesch—Hollandsch Woordenboek*. 's-Gravenhage, 1874.

スムバ語(Sm.)

Pos, W. *Soembaneesche Woordenlijst (Dialect van Kambara)*. B. K. I. 6c volgr. dl. 9., 1901.

フィリッピンの諸言語については,

Conant, C. E.: The RGH Law in Philippine Languages, *J. A. O. S.* Vol. 31, 1911.

Conant, C. E.: The Pepet Law in Philippine Languages, *Anthropos*. Vol. 7, 1912.

Conant, C. E.: Indonesian I in Philippine Languages, *J. A. O. S.* Vol. 36, 1917.

が参考になったほか(本稿においてアクセント符号は比較の作業に原則として関係がないのですべて省いた),

タガログ語(Tg.)

Крус, М. и Игнашев, С. П. *Тагальско—Русский Словарь*. Москва, 1959.

Panganiban, J. V. *Talahuluganang Pilipino—Ingles*. Maynila, 1966.

Institute of National Language. *An English—Tagalog Dictionary*. Manila, 1960.

Panganiban, J. V. *Concise English—Tagalog Dictionary*. Tokyo, 1969.

ビサヤ語(Bs.)

Hermosisima, A. T. V. *Dictionary Bisayan—English—Tagalog*. Manila, 1966.

尚, 本稿では以上のすべての言語における綴字の差違を音素表記によって統一した。